



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 問題が解けるということ

野球が大好きな甥っ子のたつのすけが幼稚園児だったときの話である。たつのすけは、数の大小はわかっても、足し算などは、当然「わからない」「できない」代物だった。なのになぜか野球の試合運び、得点の推移だけはよくわかっていた。

ある日、4対2で負けていたチームの攻撃場面がテレビで放映されていた。家族みんなが野球好きだということもあり、試合の展開をみんなでああだこうだと言いながら見守っていた。ランナーが一塁と二塁にいて、バッターボックスに人気の選手が入ったときのことである。

「ねえ、とうちゃん。これでホームラン打ったら4対5になって逆転できるねんか？」と絶好のチャンスがやってきたと期待を込めて、たつのすけは父親に確認したのである。

「そうや！たつのすけ、天才やなあ。よくわかってるなあ。」と父親は試合そっちのけで大喜びした。やがて父親は真顔になって、「そしたら、2たす3は、いくつ？」とゆっくりと落ち着いて尋ねた。するとたつのすけは小さな声で「わからへん」と、申し訳なさそうに答えたのである。現実に引き戻された父親の落胆は大きかった。

現在、たつのすけは小学4年生になっている。足し算はできるし、引き算もかけ算も、割り算もできるようになった。きっと、あのとき計算ができなかったのは数字を生活場面に当てはめ、ことの成り行きを計算式で表すことに慣れていなかったからに違いない。

先日、次年度から新たなかたちで始まる学力学習状況調査のサンプル問題が、学力向上のための校内研修で先生方一人ひとりに配布され、研修主任から試しに解いてみるよう言われた。みな無心に取り組み、その問題を解いた手応えや授業のあり方をふまえ、どうしていくとよいかなどについて感想や意見を交換し合った。

問題例には、パン職人になるまでのライフコース、パック入りの商品を買う場面、割引商品の買い物場面などが示されていた。漢字書き取りや計算問題ができるなどといった、単純な作業だけでは太刀打ちできないことが見えてくる。問題を解くにあたっては、生活場面を解説する資料や文章から必要なキーワードや数などを取り出し、問われていることに当てはめて解答していかねばならない。その土台として、提示される資料や文章が、子どもたちにとって慣れ親しんでいる場面であることが大切になってくる。

大好きな野球ならすんなり問題場面が理解できた先のたつのすけのように、毎日の生活や学校で見聞きするさまざまな場面、情報に興味や関心をもって、家族や仲間でも繰り返して話していくような生活経験、土台づくりを大切にしたいものだ。